

せいりょう園

[発行] 社会福祉法人はりま福祉会 特別養護老人ホームせいりょう園

〒675-0016 兵庫県加古川市野口町長砂 95-20 TEL 079-421-7156 FAX 079-421-6422

平成27年 4月 第170号 年間購読料1,000円 (1部100円)

メール seiryoen@bb.banban.jp ホームページ <http://www.seiryoen.or.jp>

平成27年度事業計画書

社会福祉法人はりま福祉会
せいりょう園

基本理念：『看取りの営み』は新たな命が誕生し成長して歴史が続く『源』です。

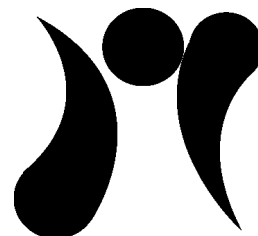
人は老いて完結する命を集団の中で看取る唯一の動物であり、看取りが社会創成の原点です。4月から要介護3以上に利用が限定される特養は、当然に命と向き合う看取りの営みが生じます。人は何時までも健康でありたいとの『願望』を抱きながらも、要介護や認知症になって苦悩し葛藤する『現実』の中で命と向き合い、老いが伴う『諦観』を養い、『思想』を確立して『死を受容』します。老いる過程で遺伝子では伝わらない『思想の芽』を次世代の心に植え付ける事が『老いる人の使命』であり、その使命を介護が支えます。願望ではなく現実と向き合う『覚悟』が重要です。介護職はその覚悟を支えて『次世代に託す未来』に備えます。『未来の行方』が介護職に委ねられている事を自覚し、覚悟に応える感性を磨き、思想を蓄え、人間の歴史を引継ぎます。

(1) 平成27年度事業方針

老いて要介護になった人を受け容れる社会であればこそ、先天的な障害のある人を包摂する社会が実現します。認知症の人が表す懸命に生きる姿は、知的障害やダウン症など多様な人々を包摂して地域社会が活力を持続する為の最も重要な要件を現しています。要介護や認知症のお年寄りが『吾身を愛しむ心』を支え、その最期を『看取り弔う』営みが、新たな命の『誕生と成長を愛おしむ心』を養い、次の世代が社会を引継ぐのです。地域包括ケアシステムの最も重要な役割を、介護事業が担います。

- ① 今年度よりケアハウスにおいて、特定施設入所者生活介護を提供します。バス・トイレ・キッチンを備えた完全個室で、在宅モデルの看取りの営みを実現できる介護施設を目指します。

(次ページへつづく)



(前ページのつづき)

- ② ユニット型特養1丁目と2丁目間の廊下を拡張して60㎡程度の工房を設けます。地域の人や子供達が訪れる創造空間として、陶芸や書道・音楽など多様に活用し、要介護や認知症の人の暮らしとの触れ合いを通して、明るい未来社会につながる途を拓きます。
- ③ 認知症の人に学ぶ場として『りょうえんカフェ一番星』を開きます。人は老いて要介護になり認知症になって懸命に生き、多くの人と良き縁を結びながら天空に昇り、朝に夕にキラキラと輝く一番星となって、地上の人々に光を注ぐ『灯り』になるのです。
- ④ 開設30年の節目の年に当たり、平成9年より発行の機関誌を総合的に編集して『30年記念誌』を創り、皆様方のご指導を仰ぎながら、地域に貢献する事業への指針とします。
- ⑤ 『地域サポート型特養』として、中部中学校区を中心に独居や高齢夫婦世帯の生活支援に当たります。老人介護支援センターとホームヘルパーが主となって安否確認や生活相談を行い、必要に応じて配食等も実施しながら、様々な地域支援事業に取り組みます。

(2) 平成27年度業務指針

1 認知症の人の介護

主役として懸命に生きる認知症の人に学び、地域の人やご家族と協働して、主役に相応しい生活を支えます。感性や感覚に働き掛ける試みで不安と折合う力を養います。『造形教室』で現れる認知症状の違いは個別処遇の目安となり、『自彊術体操』で自らの自然治癒力を高め、安心ホルモンの分泌を促す『自彊術療法』には、ご家族や地域の方の参加を呼びかけます。『音楽療法』は五感を刺激し、生のピアノ伴奏で思い出の曲を歌う『ピアノ教室』は正に回想療法です。

※「平成27年度事業計画書」の続きは、ホームページを参照してください。

<http://www.seiryoen.or.jp>

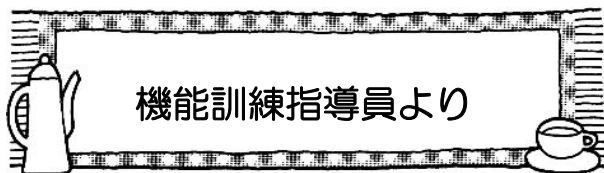


平成27年3月25日(水) & 4月3日(金) 街角 コンサート



お昼の11時より約30分程度、リバティ1階で、ボランティアさんのピアノ演奏がありました。弾きはじめると徐々に沢山の皆さんが集まって来て、優しい音色に耳を傾けていました。昼食前の和やかなヒトトキでした。

楽器を演奏するボランティアさんがおられましたら気軽に、お電話(079-421-7156)下さい。



柔道整復師 池本 登

今年の1月より、せいりょう園で機能訓練を担当する事になりました。

私の資格は、柔道整復師です。一般的には、整骨院・接骨院での骨折・脱臼・打撲・筋損傷・捻挫などの施術を行います。

最近では業務の幅も広がり、病院に勤務する理学療法士（PT）と一緒に働く方達や個人の整骨院または接骨院にデイサービスやリハビリ施設を併設して、介護業務を行う方達も増えてきました。

柔道整復師から機能訓練指導員として施設で働く事により通院される方から、寝たきりや車椅子の方々の往診に変わりました。そして今までは脱臼・捻挫・筋肉損傷の方を診てきましたが、現在は関節拘縮・骨変形・筋力低下・浮腫の方々のリハビリに変わりました。施術を行うにあたり、もう1度勉強する事が増えました。利用者の方々の診る事により、資格を取る為に勉強していた事だけが正しい訳ではない事に気づかされました。毎日が教科書や参考書には載っていない事を利用者の方々の現場の職員から学ぶ日々です。例えば足の筋力が低下して立てない方、脚が細くなっても立てる方、体調が悪いのに歩行する方、転倒して痛みがある筈なのに、何事も無かったかのように歩行する方々を観て、認知症のある方ない方の違いはあるが、痛みを「痛い」と感じさせない事や疲れを「疲れた」と感じさせないようにする認知症が身体に強く影響している部分がある事を学びました。

職員、利用者さんの家族、ボランティアの方々からの腰痛や肩こりなどの痛みや疲れの取り方を相談・質問される時、必死に答えを探す自分に内心笑ってしまう時もあります。

毎月第1月曜日に喫茶ラヴィックで地域の皆さんと一緒に夕食を食べながら対話する「共生の会」で、ある人から「高齢者の筋肉は、どうすれば鍛えられますか？」と質問がありました。私は「若い人の3倍くらいの運動をして貰えば・・・」と答えました。

現在、私の機能訓練でのリハビリは筋力アップを目標にはしていません。では、なぜリハビリを行うのか？ それは、骨や筋肉の回復が期待できない進行性の病気や加齢による老化であっても、自動的もしくは他動的に関節や筋肉を動かす事により、筋力の低下や関節の拘縮を遅らせて現状維持出来るようにリハビリを行っています。現場の職員や利用者の御家族にとっては物足りなく、不思議に思ってしまう事もあるかもしれません。しかし、健全な前期高齢者や若い人達が筋力アップを目標にトレーニングしても「辛い」「しんどい」「面倒くさい」との理由で、断念する人が多いです。まして後期高齢者の筋力アップは、非常に難しい事なのです。

今、本人の出来る事を理解して貰い、現在の状態を保ちつつ利用者1人1人の状態を診ながら、人に1段階上のリハビリに移行する事を決めて頂きます。機能訓練指導員として、これからも利用者の方々から学んでいきたいと思っています。

介護についてみんなで語ろう会（3月27日）

テーマ「眼張る介護」



せいりょう園老人介護支援センター
社会福祉士 吉田 知一

今回の語ろう会では、児童文学作家で詩人の藤川幸之助さんの詩を紹介しました。

○藤川幸之助さんは・・・

1962年、熊本県生まれの方で、小学校の教師を経て、現在は、詩作・文筆活動に専念され、講演会など開催されている方です。20年前に母親がアルツハイマー病と診断されます。当初、父親に任せきりにしていた母の介護を、父の死を機に、本格的に携わり、介護の大変さ、喜び、気づきを実際の経験から詩や講演を通し発信されています。

詩や講演の中で『「認知症の母を介護して、私が母を支えていた」と思っていました。母を介護する中で、「私が母に人間性を引き出され、精神的に母に支えられていた」と感じるのです。』という表現をされています。「支えているのに支えられている」とはどういった状況なのでしょう。以下の詩を元に皆さんと語り合いました。

眼張る 藤川幸之助

がんばるとは
もともと「眼張る」と書くらしい
目を大きく見開いて見据えること

言葉のない母の傍らに
ただ何もしないで黙って座り
見開いた眼でしっかりと母を見つめる
見つめなければ分からない
かすかな母の動きがある
眼張らなければ聞こえてこない
小さな母のうなり声がある
言葉にならないむき出しの母の心

言葉になる前の言葉ではないもの
伝えあいたいのは言葉ではないはずだ
我々は見つめ合うことを忘れて
あまりにも言葉に頼りすぎてしまった
母を見つめていると
母の眼にも
この私がしっかりと映っていた
母さん、お互い眼張っているなあ
母の眼に映る自分自身が
しっかりと口を噤んでいるか確かめて
また、かっと目を見開き
母を見つめ直す

感想

この介護の仕事のやりがいは何か、と問われた場合「お年寄りの笑顔」と答える介護職は多く、良く耳にします。笑顔であることに越したことはありませんが、笑顔でいるかどうかは本人の自由であり、笑いたくない日もあるかもしれません。それ以前に、どのお年寄りも老衰の過程にあり、笑顔を作ることの出来ない状況がいずれ訪れます。その姿を目の当たりにした時、何をやりがいに感じれば良いのでしょうか。また、老人ホームで暮らしている利用者の姿を見て、「楽しそうに見えない」「退屈にしている」「机に突っ伏して寝ている」とご意見をいただく場合もあります。お年寄りは常々楽しそうにしていなければいけない存在なのでしょうか。もしくは、私たち介護に携わる人間が退屈させないようにしなければならないのでしょうか。

せいりょう園で実習を希望する実習生には、利用者の生活に身を置き過ぎていただく中で感じたことや気づいたことを考える機会を作っています。特に何かしなければならない、という訳でもないので実習生は自分の身の置き所がなくウロウロして困ります。たどり着く先は、決まって会話の出来る利用者の傍らに落ち着きます。認知症の症状があり、会話の難しい人のそばには行きません。反応がないと自分がどうしたら良いか分からないからです。詩の中にある、ただ何もしないで黙って座り、見開いた眼でしっかりと向き合う、ことが出来ないのです。眼張らなければ聞こえてこない、心の声を聴くには至らないのです。

藤川氏は著書の「徘徊と笑うなかれ」のあとがきの中で、このように語っておられます。『ずっと私は「できる」ことが本来の人間の姿だと思い違いをしていました。だから、認知症になって何もかもできなくなっていく母を見て、人間としてだめになっていると思っていましたが、母はだめになっていたのではなく、生まれた時のような「存在そのもの」に戻って、その返っていく姿で私を育てていたのです』。

「存在そのもの」を感じる事が出来たのは、「存在そのもの」を表現として尊重することが出来たからではないでしょうか。「育てられた」、と感じたのは認知症の母と向き合い理解しようとし、学ぼうとした、からではないでしょうか。私たちは、介護を「頑張る」ことではなく、その人の存在を「眼張る」ことが大切なのではないか、とこの詩を読み、考えさせられました。



平成 27 年 3 月 22 日（日）加古川文化フェスティバル



ケアハウス入居者と共に、加古川市民会館で開催されていた「加古川文化フェスティバル」を観覧しました。フラダンスは、鮮やかな衣装で披露しているのも 50～60 代くらいの方々が多く、笑顔で楽しく健康的に踊っていたのが印象に残りました。



仏教講話 4月6日(月)



真宗 大谷派 光念寺
本多 正尚 住職

ディサービス 谷澤 高明

一体どこまでエスカレートするのだろうか。世界各地で事件事故が多発している。地名、国名は聞いたことがあっても、頭の中で名前と場所がはっきりしない所で悲惨な事件が起こる。その都度世界地図を広げて確認する。かつて訪れた国、地域との位置関係を思い、ぞっとすることがある。もし白地図に事件が起きた場所を色づけすれば、どんな模様になるのだろうかと思うと、恐ろしくなる。

しかし、面白いといえば語弊があるかもしれないが、事が起こった時、国というか首長の動きには、感じるどころがある。フットワーク良く、次々と対応策、善後策を発する首長もあれば、直ちにそれに異を唱える首長もある。歯がゆいのは他国の様子をキョロキョロ伺っているだけで、何もしないで先延ばしする国である。早々と発せられる対応が適切であるか否かは、後の歴史が証明するまで分からないとしても、機敏に意思表示してくれる方が、危うさを感じながらも、生活感、連帯感を感じることができる。これは国の大事だけではない。一般の普通の社会、組織でも言えることではないだろうか。何か懸念されることが生じたと感じたら行動を起こす。そうすることによってより適切な対応を得る可能性は高まるような気がする。ただし、それは判断能力と、その結果に責任を負う潔さを兼ね備えた者でなければできないことではあるが。

週末に満開となった桜の花、きのうからの意地悪な雨が一気に散らし始めた。少し風も出てきて肌寒くなってきた。今月の仏教講話は、真宗大谷派 光念寺 本多正尚ご住職に来て頂いた。「桜が咲きましたね！しかし、いやな雨ですね。すぐ散ってしまいますかね。残念ですね」。「お寺にも桜がありますか？」と声。「あります、3本だけですけどね」「3本あったら十分ですわ」。いつもの通りなごやかな雰囲気では始まったが、「私たちが生まれてきたことは、ただ事ではないのですよ。生きていることもただ事ではないのですよ」といきなり本題にはいられる。『人身受け難し、今已に受く』(にんじんうけがたし・いますでにうく)』という仏教用語を紹介された。これは、「この世に人として命を頂いて生まれてくることは非常に稀(まれ)なことです。命あるものは無数にいます。何に生まれるかわからない中で、人としての命を頂いていることは貴重なことなのです」と解釈され、人間に生まれたことはただ事ではないのである、という最初のお言葉につながってゆく。

ご住職のお知り合いの先生のお話をされた。その先生は終戦直後にお生まれになったが、父親は一念発起して僧侶になられたらしい。終戦直後の生活に苦しい時期、一般の民百姓であっても食物に困窮する世に、彼らの布施によって生活を支えられる僧侶の身分はまことに厳しいものであった。先生は父親に「こんな世に坊さんになったりして、喰いものにも困るような生

活を送らねばならないではないですか」と、文句を言っただけ。父親は「同じ子供を持つなら、もっとましな子供を授かりたかった」と反論したとか。

親子げんかが始まったわけだが、ここで「人はいつ頃から喧嘩するのでしょうか？」と話された。生れて1年くらいは、それこそ『いのちそのもの』でケンカなんかしない、できない。やがて自意識がついてくると、意に反するモノに対して反発し、ケンカすることが始まる。そのうち、いろんな経験をつんで自らの悟りの境地(仏教界では浄土)に達するものもでてくる。しかし、浄土、悟りは人それぞれによって違うものであり、身分階級に関係ない。一般社会にあって、信仰にあつく、特に行状の美しい者を『妙好人：みょうこうにん』と呼び、江戸の後半から大正時代まで『妙好人伝』として何編か編集されている。妙好人を最初に取り上げ、紹介したのは、仏教学者で『禅』を欧米に広めた『鈴木大拙：だいせつ』とのことである。「妙好人」という言葉、全く初めて耳にする言葉であったので、少し調べてみた。その中にこんな説明があった。「妙好人とは、人として生まれた事に対する尊さを言い表している言葉です。貴重な人間として生まれた以上、それぞれには果たす役割があります。役割はおのずと変わります。その役割に未だ気づいていない人は気づく努力をすべきで、既に気づいたと思っている人は全うすべく努力します。その過程で役割は一つでないことに気づかされます」というものであった。これだけだとかなり高尚に思われがちだが、ご住職のお話だと記録されている本人たちは、全くの凡人で、読み書きすら十分にできない人もあるという。ある職人は自分の削った木の皮(カンナクズ)に浄土を「上をど」と書きとめているという。ご住職は最後にこう話された。「皆さんもご自分の生きざまを残してあげてください。日記でも、メモでも。どんなことでも、どこにでもいいんです。生まれてきたことは、ただ事ではないんです。得がたい命、精一杯生きたと心から言えるように、示してください」。

ありがとうございました。5月の講話は第1週が祝日なので、第2週の11日の予定です。

【せいりょう園空き情報 平成27年4月15日現在】

- ① ケアハウス：3室 (バス・トイレ・キッチン付24㎡)
- ② グループホーム：空きなし
- ③ グループホームまどか：空きなし
- ④ サービス付き高齢者向け住宅「リバティかこがわ」：4室
- ⑤ サービス付き高齢者向け住宅「自愛の家さくら」：空きあり

[問合せ先] せいりょう園 TEL(079)421-7156/(079)424-3433

【せいりょう園待機者状況 平成27年4月10日現在】

○入所判定済み者 348人(グループの内)

Iグループ…115名 IIグループ…126名 IIIグループ…107名

※このグループ分けは、県の「入所判定マニュアル」に基づき、緊急性を評価して分けています。Iグループが最も緊急性の高いグループとなっています。

判定後、状況の変化がありましたら、ご連絡下さい。



桜をバックに記念撮影。

お花見 2015

4/2(木) 快晴

せいりょう園内の1本桜が、ほぼ満開状態となり、沢山の方々が愛でていました。しかし次の日から「花散らしの雨」が続いてしまいました。

4/11(土) 快晴

この日は「お花見食事会」桜は未だ残っており、微風で花びらが舞い散っていく姿が雅やかでした。



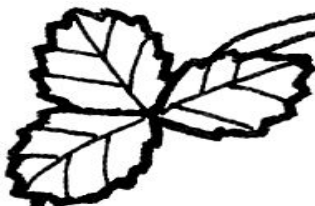
職員と共に1本桜を見上げる。



「自愛の家さくら」の2階より、同じ目線で桜を眺める。



4月11日に、お花見食事会を行う。入居者・家族・職員で団欒を楽しみました。



厨房だより

管理栄養士 田村愛弓

今年は残念な事に、桜の開花時期に雨が続きました。あまりお花見は楽しめなかったかもしれませんが、季節の移り変わりに合わせて旬ものが新しく出てくるのでその点はとても楽しみです。今後5月～9月は私達になじみ深い果物がおいしい時期を迎えます。露地栽培の苺が5・6月に、7月からは桃が、桃の少し後には葡萄がおいしい時期になります。今回はそんなおいしい果物たちの中から、苺についてご紹介します。殆どの果物は生で食べるため、ビタミンCが摂りやすいことは皆様ご存じでしょう。ですが果物それぞれに含有量の違いがあり注意が必要です。苺は果物の中では果肉が小さい部類ですが、含んでいるビタミンC量は優秀です。一般的には中粒サイズの苺を7粒ほど食べると、一日に必要なビタミンCは摂れるといわれます。一般的に一回に食べる苺2～3粒でも、かんきつ系果物で同じ量のビタミンCを摂ろうとすると中サイズで1個は摂取が必要ですので、苺の方が手軽に食べられるのではないのでしょうか。その他苺はビタミンC以外にも女性の美肌維持に大きく貢献する果物ですので、なかなか食べる機会がないという方も、ぜひ旬の時期には味わってみてください。

